

京都大学	博士(文学)	氏名	鄭 宰相
論文題目	荀子思想の研究		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本研究は、荀子思想の諸問題の分析を中心課題とし、さらに中国古代思想の新たな理解を目的とするものである。近代的学問研究法が導入される際、荀子の思想は中国古代の「哲学」「社会学」および「論理学」を代表するものとして取り上げられた。それは『荀子』の中に近代学問における諸範疇を「発見」したことに他ならない。『荀子』は近代的視座から解明されるところもあるが、それと同時にその死角に入るところもある。荀子思想の限界や不完全性とみなされた多くの部分は、まさにその死角に入ったものである。しかし、そのような部分は、近代的な観念と古代中国人の観念が食い違うところであり、それこそが中国古代思想を特徴づけるものであると考えられる。本研究は、従来、荀子思想の中で、思想的不整合として指摘されてきた部分を取り上げ、それを中国古代思想史の文脈で読み直し、荀子思想を再解釈したものである。それによって中国古代思想の諸問題に対する新たな示唆が得られると思う。</p> <p><b>第一章 『荀子』大一考</b></p> <p>戦国時代においてもともと道家の用語として登場した「大一」(=太一)は、道家のいう「道」の別称として用いられ、万物を生み出す根源、万物を万物たらしめる理法の意味で語られた。しかし「大一」は道家系の文献のみでなく、『礼記』礼運篇や『荀子』礼論篇のような儒家系の文献にもその用例がみられる。『礼記』礼運篇の「大一」は道家の「大一」概念を受容し、礼を「大一」に結びつけることによって、人間社会の規範を形而上学的に根拠づけた。</p> <p>従来の研究では、『荀子』の「大一」は礼運篇の「大一」と同様な意味を持つと考えられてきた。しかし、そのような見方は、礼の起源を「聖人の偽」に求める荀子の思想と矛盾するのみならず、『荀子』礼論篇にみえる二つの「大一」の意味を矛盾させてしまう。本章では荀子の「大一」が、礼運篇で語られているような太初の天地未分の状態ではなく、礼による現実社会の「統合」を意味することを明らかにした。つまり、荀子は道家の「大一」概念を人文的な礼の世界を語る概念へと変容させているのである。</p> <p>『礼記』礼運篇の「大一」と『荀子』の「大一」の先後関係は定かではないが、両者の「大一」概念の相違から、戦国末期の儒家における礼の起源説の分岐をみることができる。一つは形而上学的な大一起源説として、もう一つは人為的な聖人制作説として、両者は「大一」の解釈をめぐって思想史上の緊張関係にあったとみられる。し</p>			

かし戦国末期以後、道家と礼運篇の大一説が主流となり、後には礼運篇の大一説をもって荀子の「大一」を解釈する結果となったと考えられる。

## 第二章 自然的な情と然るべき情 — 儒家思想における礼論の根幹

本章においては、戦国儒家思想において礼論の根幹となる性情論の問題を「情」に焦点をあてて、各思想家の学説の理論的な構造と特質を考察し、それらの思想的位位置づけを試みた。

『荀子』において「情」は、礼に背くものとして記述されると同時に、また礼の根拠として記述されており、二つの記述は一見矛盾するように思われる。そのため、情を礼の拠り所とする記述は、性悪説との整合性をはかるために原文の文字を改めて読まれるなど、従来ほとんど注目されてこなかった。しかし、情についてのアンビバレントな態度は、実は荀子の礼論において重要な要素である。

荀子は礼の必要性和正当性を確保するために、人間の自然の情性が「悪」に流れる傾向があると論じながらも、もう一方で死に対しては哀しみ(哀しむべきである)、慶事には喜ぶ(喜ぶべきである)という然るべき情の発現こそ、儀礼行為を存立させる根幹であることも明確に認識していた。人間の情をどのように「然るべき形」で発現させるかという問題は、儒家の人性論、礼教論、政治論の核心問題だったのである。儒家における「情の然るべき形」とは、詩・書・礼・楽が語る価値、すなわち父子・君臣・夫婦・長幼・朋友の人倫にかなう心性と行為を指す。

戦国時代に巻き起こった人間の性情に関する議論は、情と礼の関係をどのように捉えるかに直結するものであった。『性自命出』・孟子・荀子のいずれも、人は「人倫にかなう情を発現して然るべき」ことを唱えているが、『性自命出』と荀子の場合、それは自然にそうなるものではなく、聖人の教え(礼)を学習することによって実現されるとする。一方、孟子の場合は、かかる然るべき情は自然の情の表れにほかならないと考え、人の生まれつきの「性」に潜在していると語った。このように、然るべき情と自然の情の関係についてそれぞれ見解が分かれ、またそれによって性論も分岐していくことになる。性の善不善を論じる各思想家の性論は、人倫にかなう情の発現を理論化するものであったといえる。

情と礼、自然の情と然るべき情という問題について、孟子の性善説と荀子の性悪説を両極とみるならば、『性自命出』はその両極に分かれる思考の端緒が柔軟に展開されているので、その成書年代は『孟子』と同時期か、それよりやや早い時期と考えられる。

## 第三章 中国古代思想史における礼治と法治 — 荀子の「類」概念の分析を中心に

本章では『荀子』の「類」概念を手がかりに、中国古代における法治と礼治の問題について検討した。まず、荀子と法家および以後の法制史の展開を中心に、法律類推

の問題を考察した。荀子は以前の儒者とは異なり、成文法の制定と公布に賛同し、法律の遵守を強調した。しかし、荀子はそれと同時に法律類推を通じて法律の不備を補うべきとした。そして法律類推における恣意的解釈と専断を防ぐために、司法官吏の領域を成文法の遵守に制限し、法律類推を儒者の領域に帰属させた。荀子は、類推の原理を「礼義」という価値規範に基づいて規定することによって、法律の運用を礼の精神のもとに包摂したのである。

成文法による法治を求めながらも司法の裁量権を「大儒」、すなわち天子と三公に限って認めた荀子の礼法論は、以後中国の司法制度の理論的モデルとなった。

「大儒」において「統類」すなわち、統一的原理の把握とその類推適用は、儀礼のみならず、法を含む、人間社会における様々な事柄の処理に欠かせない能力である。荀子にとって社会は一貫した原理のもとで構成されたものであり、その原理とは「礼義」に他ならない。したがって、荀子が理想とする為政者、すなわち「大儒」とは、このような「礼義」に基づき、礼であれ、法であれ、それらの根底にある統一的な原理を把握し、その原理を適用して処理する存在といえよう。

#### 第四章 荀子の名実論 — 単名と兼名の問題を中心に

名実論は中国古代論理思想を理解する上で重要な問題であるが、ギリシャの形式論理学の基準ではうまく捉えられないところがある。形式論理学とは異なる古代漢語の特質や思想的背景を考慮して理解する必要があるのである。

名実問題をめぐる先秦諸家の論争は実質的には各家の政治思想・社会思想の見解や路線の差から起こるが、表面的には「兼名」が名実問題を引き起こす一つの原因となる。たとえば、名家の「白馬非馬」「堅白石二」、墨家の「牛馬之非牛」などの命題はみな、「白馬」「堅白石」「牛馬」が兼名であるからこそ構成できるものである。荀子はこのような命題に論理的に対応するため、単名と兼名、そして共名などの概念を提出したと考えられる。

「単名」は単音節語（一文字の名称）であり、「兼名」は複音節語（二文字以上の名称）である。単名の実質と兼名の実質が「相い避けない場合」（無所相避）、そのどちらかが「共名」（異実同名）となる。「馬」は「白馬」と「黄馬」に対しては「共名」となり、「牛馬」に対しては「別名」となる。つまり、単名と兼名は名の形式上の概念であり、共名と別名は名の機能上の概念である。以上の考察によれば、単名と兼名の関係から共名の導出過程が定式化できる。

大共名と大別名については、いずれも複数の事物を一つの名で呼んだ「異実同名」（徧挙）であるとみれば、『荀子』の原文の文字を改めなくとも前後文脈および概念間の矛盾なく理解できる。「大共名」は共名の中で一番大きいものである。大共名である「物」はあらゆる存在（万物）を「徧挙」した名である。「大別名」もまた大共名と同じく「徧挙」した名称である。そのいずれも「徧挙」であるが、その機能は異なる。別名の機

能はある物事を他の物事から区別することである。「別名」とは「白馬」「黄馬」のように事物を個別的に区分する名称であり、「大別名」とは「鳥獸」「草木」のように事物を類別する名称、つまり「大きくグルーピングして分ける名」である。以上の考察によれば、王制篇の「水火」「草木」「禽獸」「人」はみな事物を類別した大別名であると考えることができる。そして、荀子思想において「人」という大別名は、他の存在から礼儀の有無を基準に類別した名称として理解される。

さらに単名と兼名と関連して、ことばが単音節語から複音節語へ発達していく古代漢語の歴史に注目する。古代漢語は単音節語のもつ意味の多義性や曖昧さを制限するため、複音節語化した連語を造語する。そのような漢語の変遷史の観点からみれば、荀子は、漢語の単音節語と複音節語を、「単名」と「兼名」とに概念化したといえる。そしてそれは荀子の正名論と密接に関連する。つまり、孔子が「君君、臣臣、父父、子子」のように正名をいうならば、荀子は「君」（形式上単名／機能上共名）を「聖君」「中君」「暴君」（形式上兼名／機能上別名）の三つに区分し、「臣」を「聖臣」「功臣」「篡臣」「態臣」とに区分して「正名」を唱えるのである。



(論文審査の結果の要旨)

荀子思想の研究は現在大きな転換期にさしかかっている。それは従来の方法による研究がほぼ行き着くところまで行き尽くし、もはや手詰まり状態に立ち至ったことと、郭店楚簡や上博楚簡をはじめとする近年の新出土文献の研究の進展により、先秦儒学全体に対して根本的見直しが迫られていること、この二つの理由からである。すなわち今日の荀子研究は、楚簡研究の成果を見据えつつそれと対峙し、かつこれまでとは一線を画する新たな視点・方法を導入することが求められているのである。この困難な課題に対して論者は、従来の西洋哲学の哲学概念を用いての分析を止め、あくまで中国古代思想史の文脈の中でその思考様式に即して読み解くという立場を堅持することによって立ち向かおうとする。この西洋哲学の哲学概念を用いての分析を止め、あくまで中国思想の思考様式に即して分析するという立場は、中国思想研究全般においてはすでに主流となりつつあると思われるが、荀子研究においてはなおほとんど見られぬものであり、この一点だけでも本論文の意義は少なくない。

第一章『荀子』大一考」、第二章「自然的な情と然るべき情——儒家思想における礼論の根幹—」、第三章「中国古代思想史における礼治と法治—荀子の「類」概念の分析を中心に—」、第四章「荀子の名実論—単名と兼名の問題を中心に—」という章題からもうかがえるように、論者が取り上げたテーマは、いずれも荀子の思想的不整合として問題視されてきたものばかりである。すなわち荀子が、礼の起源を「聖人の偽(人為)」に求めながら、一方で形而上の大一に根拠を置こうとしていることの矛盾、礼を「自然的な情」にもとづくものとしながら、一方で「自然の情に反する」ものとしている矛盾、「大別名」という論理概念における外延と内包の混乱であるが、敢えてそれらを取り上げたのは、これらの課題こそ上述の中国古代思想史の文脈の中でその思考様式に即して読み解こうとする自らの立場にとっての恰好の試金石となるという論者の強い意欲の現れであって、まずその点を高く評価したい。また結果的にも論者の試みは基本的に成功していると認められる。

大一については、荀子のそれは形而上的な原理ではなく、「礼による現実社会の統合」を意味するとし、礼が自然の情にもとづくか否かについては、礼と情の相補と乖離の両面性は儒家思想全般に見られる傾向で、荀子に独自のものではなく、荀子はその性悪論の展開においては敢えてその乖離性のみを強調したのだとする。いずれも納得のいく解釈である。また第二章では、上述の楚簡研究との対峙の一環として郭店楚簡『性自命出』を取り上げ、『性自命出』にも礼と情の相補と乖離の両面性が見られることを指摘し、その概念的誤謬を解決するために性善・性無善悪・性悪の論争が起こされたのだと論じているが、この説も肯綮に中るものである。

第三章では、「類」を「法的類推」と規定し、「類」概念の政治性を論述しているが、その行論は明快であり、本論文中、最も優れた部分と評価したい。第四章では、古代漢語の特質の考察を踏まえて、「大別名」は事物の上位のグルーピングと定めている。

その説の当否についてはなお議論の余地があろうが、原文を改めずもとのままに読もうとする論者の姿勢は首肯できる。本章に限らず、本論文では原文どおり読もうとする方針・姿勢が一貫しているが、この姿勢はこれまでのややもすれば文字をすぐ改める傾向に対する頂門の一針として大いに評価したい。また、その姿勢と相表裏して、これまで荀子の本質を理解できていないものとして貶められてきた楊倞注の価値を再確認しているのも本論文の大きな功績と言えよう。

以上述べたごとく、本論文は荀子研究において、独自の地歩を占めるに値する出来栄えとなっている。ただ、個々の論述にはなお脆弱な部分も残しており、従来の通説を完全に論破したとはまでは言えない。今後のさらなる研鑽を期待する。

なお附録として「楊倞の荀子注と『方言』」「韓国荀子研究評述」「日本中国古代論理思想研究評述」の三篇が収められているが、後二者の「評述」は単なる研究目録の羅列ではなく、個々の研究の特色を詳細に論述し、それぞれの研究史における時代的变化とその変化の中に通底する基本的性格を一読了然たらしめる充実した内容となっており、論文に十分匹敵する水準のものであることを附言しておく。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2010年2月19日、調査委員3名が論文内容とそれに関連する事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。